

大学等名	神戸常盤大学
プログラム名	ときわM´(MDASH)

プログラムを構成する授業科目について

① 対象となる学部・学科名称 ② 教育プログラムの修了要件

③ 修了要件

修了要件は、全学共通開設である基盤教育科目群の「情報基礎(1単位)」および「情報メディア演習(1単位)」を修得することである。
 なお、オプション内容として、全学共通開設である基盤教育科目群「基礎統計学(1単位)」「プログラミング入門(1単位)」を開設。
 各学科におけるカリキュラム上の位置づけは次のとおりである。
 ・保健科学部医療検査学科では、「情報基礎(1単位)」は必修、「情報メディア演習(1単位)」は選択必修、「基礎統計学(1単位)」は必修、「プログラミング入門(1単位)」は選択必修
 ・保健科学部診療放射線学科では、「情報基礎(1単位)」は必修、「情報メディア演習(1単位)」は必修、「基礎統計学(1単位)」は必修、「プログラミング入門(1単位)」は選択
 ・保健科学部口腔保健学科では、「情報基礎(1単位)」は必修、「情報メディア演習(1単位)」は必修、「基礎統計学(1単位)」は必修、「プログラミング入門(1単位)」は選択
 ・保健科学部看護学科では、「情報基礎(1単位)」は選択必修、「情報メディア演習(1単位)」は必修、「基礎統計学(1単位)」は選択必修、「プログラミング入門(1単位)」は選択必修
 ・教育学部こども教育学科では、「情報基礎(1単位)」「情報メディア演習(1単位)」は共に選択だが、実質は免許資格必修であり、「基礎統計学(1単位)」は選択必修、「プログラミング入門(1単位)」は選択必修

必要最低単位数 単位 履修必須の有無

④ 現在進行中の社会変化(第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等)に深く寄与しているものであり、それが自らの生活と密接に結びついている」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	1-1	1-6	授業科目	単位数	必須	1-1	1-6
情報基礎	1	○	○	○					
情報メディア演習	1	○	○	○					

⑤ 「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得るもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	1-2	1-3	授業科目	単位数	必須	1-2	1-3
情報基礎	1	○	○						
情報メディア演習	1	○	○	○					

⑥ 「様々なデータ利活用の現場におけるデータ利活用事例が示され、様々な適用領域(流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等)の知見と組み合わせることで価値を創出するもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	1-4	1-5	授業科目	単位数	必須	1-4	1-5
情報基礎	1	○	○	○					
情報メディア演習	1	○	○	○					

⑦ 「活用に当たっての様々な留意事項(ELSI、個人情報、データ倫理、AI社会原則等)を考慮し、情報セキュリティや情報漏洩等、データを守る上での留意事項への理解をする」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	3-1	3-2	授業科目	単位数	必須	3-1	3-2
情報基礎	1	○	○	○					

⑧「実データ・実課題(学術データ等を含む)を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関するもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	2-1	2-2	2-3	授業科目	単位数	必須	2-1	2-2	2-3
情報基礎	1	○	○	○	○						

⑨ 選択「4. オプション」の内容を含む授業科目

授業科目	選択項目	授業科目	選択項目
基礎統計学	4-1統計および数理基礎		
プログラミング入門	4-3データ構造とプログラミング基礎		

⑩ プログラムを構成する授業の内容

授業に含まれている内容・要素	講義内容
(1) 現在進行中の社会変化(第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等)に深く寄与しているものであり、それが自らの生活と密接に結びついている	1-1 <ul style="list-style-type: none"> ・Society 5.0、データ駆動型社会「情報基礎」(10回目) ・データ量の増加、計算機の処理性能の向上、AIの非連続的進化「情報基礎」(10回目) ・データを起点としたものの見方、人間の知的活動を起点としたものの見方「情報基礎」(10回目) ・ビッグデータ、IoT、AI、ロボット「情報メディア演習」(4回目) ・人間の知的活動とAIの関係性「情報メディア演習」(4回目)
	1-6 <ul style="list-style-type: none"> ・AI等を活用した新しいビジネスモデル「情報基礎」(5回目) ・AI最新技術の活用例「情報メディア演習」(11回目 & 12回目の前半)
(2) 「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得るもの	1-2 <ul style="list-style-type: none"> ・1次データ、2次データ「情報基礎」(5回目) ・構造化データ、非構造化データ「情報基礎」(9回目) ・調査データ、実験データ、人の行動ログデータ、機械の稼働ログデータ「情報メディア演習」(5回目 & 10回目)
	1-3 <ul style="list-style-type: none"> ・データ・AI活用領域の広がり「情報メディア演習」(12回目 & 13回目) ・研究開発、調達、製造、物流、販売、マーケティング、サービス「情報メディア演習」(14回目)
(3) 様々なデータ活用の現場におけるデータ活用事例が示され、様々な適用領域(流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等)の知見と組み合わせることで価値を創出するもの	1-4 <ul style="list-style-type: none"> ・データ可視化「情報基礎」(9回目) ・データ解析「情報メディア演習」(9回目) ・非構造化データ処理「情報メディア演習」(9回目)
	1-5 <ul style="list-style-type: none"> ・データサイエンスのサイクル「情報基礎」(5回目 & 9回目) ・教育やヘルスケア等におけるデータ・AI活用事例紹介「情報メディア演習」(10回目)

(4) 活用に当たっての様々な留意事項 (ELSI, 個人情報, データ倫理, AI社会原則等)を考慮し、情報セキュリティや情報漏洩等、データを守る上での留意事項への理解をする	3-1	<ul style="list-style-type: none"> ・ELSI(Ethical, Legal and Social Issues)「情報基礎」(3回目 & 12回目) ・個人情報保護「情報基礎」(3回目 & 12回目) ・データ倫理: データのねつ造、改ざん、盗用、プライバシー保護「情報基礎」(3回目 & 12回目)
	3-2	<ul style="list-style-type: none"> ・情報セキュリティ: 機密性、完全性、可用性「情報基礎」(4回目) ・匿名加工情報、暗号化、パスワード「情報基礎」(4回目) ・情報漏洩等によるセキュリティ事故の事例紹介「情報基礎」(4回目)
(5) 実データ・実課題 (学術データ等を含む)を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関するもの	2-1	<ul style="list-style-type: none"> ・データの種類「情報基礎」(11回目) ・データの分布と代表値「情報基礎」(11回目) ・代表値の性質の違い「情報基礎」(11回目) ・データのばらつき「情報基礎」(11回目) ・相関と因果「情報基礎」(11回目) ・母集団と標本抽出「情報基礎」(11回目)
	2-2	<ul style="list-style-type: none"> ・データ表現「情報基礎」(14回目) ・データの図表表現「情報基礎」(14回目) ・不適切なグラフ表現「情報基礎」(14回目)
	2-3	<ul style="list-style-type: none"> ・データの集計(和、平均)「情報基礎」(13回目) ・データの並び替え、ランキング「情報基礎」(13回目) ・データ解析ツール「情報基礎」(13回目) ・表形式のデータ「情報基礎」(13回目)

⑪ プログラムの学修成果(学生等が身に付けられる能力等)

- ・データの活用時の倫理・法律・社会的な留意事項や情報セキュリティなどの素養
- ・データ駆動型アプローチに関する素養ならびにAIを利活用するための素養
- ・文書作成ソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトに関するスキル
- ・記述統計学に基づくデータの分析(基本統計量、統計図表、回帰や相関関係)などのデータリテラシー

プログラムの履修者数等の実績について

①プログラム開設年度 令和4 年度

②履修者・修了者の実績

学部・学科名称	学生数	入学定員	収容定員	令和4年度						令和3年度						令和2年度						令和元年度						平成30年度						平成29年度						履修者数合計	履修率
				履修者数			修了者数			履修者数			修了者数			履修者数			修了者数			履修者数			修了者数			履修者数			修了者数										
				合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性								
保健科学部・医療検査学科	348	80	320	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0%						
保健科学部・診療放射線学科 (R2開設)	251	75	300	88	45	43	87	44	43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	88	29%						
保健科学部・口腔保健学科 (R4開設)	67	70	280	67	0	67	67	0	67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	67	24%						
保健科学部・看護学科	349	85	340	94	5	89	94	5	89	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	94	28%						
教育学部・こども教育学科	355	80	320	89	15	74	89	15	74	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	89	28%						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
				0			0			0			0			0			0			0			0			0			0			0	#DIV/0!						
合計	1,370	390	1,560	338	65	273	337	64	273	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	338	22%						

大学等名

教育の質・履修者数を向上させるための体制・計画について

- ① 全学の教員数 (常勤) 人 (非常勤) 人
- ② プログラムの授業を教えている教員数 人
- ③ プログラムの運営責任者
 (責任者名) (役職名)

- ④ プログラムを改善・進化させるための体制(委員会・組織等)

 (責任者名) (役職名)

- ⑤ プログラムを改善・進化させるための体制を定める規則名称

- ⑥ 体制の目的
- ときわ教育推進機構は、全学的な「教育の質保証」システムの構築を目指し、学内の各組織と連携し、教育改革を主導的に設計・推進し、個別最適化した教育実践の支援を目的としている。

本機構の業務の一部である、基盤教育の運営と推進、「基盤教育」と「専門教育」の有機的な連携をはかりつつ、数理・データサイエンス・AI教育プログラムの推進に向けて、授業担当教員でW.G.(ときわM'教職員W.G.)を設置し、教育内容や評価などについて、不断の改善を図る予定である。

- ⑦ 具体的な構成員
- ときわ教育推進機構 機構長 兼 副学長 大森雅人
 ときわ教育推進機構 副機構長 兼 保健科学部 教授 山城圭介
 保健科学部 教授 松元英理子
 保健科学部 教授 新谷路子
 保健科学部 教授 對間博之
 保健科学部 教授 山崎麻由美
 保健科学部 教授 福田昌代
 保健科学部 教授 島内敦子
 保健科学部 教授 中田康夫
 教育学部 教授 山下敦子
 教育学部 講師 京極重智
 事務局 学術推進課長 野田育宏
 事務局 教務課長 猿渡康博
 事務局 学術推進課員 伴仲謙欣

⑧ 履修者数・履修率の向上に向けた計画 ※様式1の「履修必須の有無」で「計画がある」としている場合は詳細について記載すること

令和4年度実績	22%	令和5年度予定	40%	令和6年度予定	60%
令和7年度予定	80%	令和8年度予定	90%	収容定員(名)	1,560

具体的な計画

令和7年度までは、医療検査学科は「情報メディア演習」を、看護学科は「情報基礎」をより多くの学生が履修できるように履修上の工夫を行う。
将来的には、令和8年度の基盤教育群の見直しにて、医療検査学科は「情報メディア演習」を、看護学科は「情報基礎」を必修にする計画である。

⑨ 学部・学科に関係なく希望する学生全員が受講可能となるような必要な体制・取組等

全学部の共通科目として教育内容や方法を全学統一することで、学部によらず同内容のプログラムを履修できるようにしている。
そのために教職員W.G.を結成し、教育方法や教材開発を行い教育内容の質を担保している。

⑩ できる限り多くの学生が履修できるような具体的な周知方法・取組

原則、各学科におけるカリキュラム上の必修化を基本としている。
一部必修化していない学科においては、履修上の工夫で学生が履修し易い環境を整えている。

⑪ できる限り多くの学生が履修・修得できるようなサポート体制

LMSを活用して、教職員W.G.で作成したオンデマンド教材をに格納し、繰り返し学修できる体制を整えている。

⑫ 授業時間内外で学習指導、質問を受け付ける具体的な仕組み

LMS上で、学生の質問に対して回答できる体制を整えている。

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

ときわ教育推進機構	
(責任者名) 大森雅人	(役職名) ときわ教育推進機構長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	ときわ教育推進機構・IR室において、本プログラムの履修・修得・評価情報の収集と分析を実施し、分析結果に基づき教職員W.G.が各授業科目の改善を行っている。
学修成果	アセスメント・プランにおける評価項目の一つである「在学生調査」「卒業時調査」において、本プログラムに関する項目を設け、分析することで、本プログラムの評価・改善に活用している。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本プログラムを構成する授業科目を含んだすべての授業科目を対象に、自己点検・評価委員会が「授業評価アンケート」を実施しており、学生の理解度を分析している。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	「授業評価アンケート」において、本プログラムを構成するすべて授業科目について、学生へのメッセージを作成し、学内に公表することで、下級生の受講モチベーションアップに繋がる体制を講じている。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	ときわ教育推進機構における継続的な議論を経て、本プログラムを設計、実施した。一部の学科では選択必修ではあるが、令和8年度に予定している基盤教育科目群の見直しで必修化を予定しており、履修者数、履修率の向上にむけて推進している。また、教職員W.G.が継続的に教育内容の見直しを行い、プログラムの質向上にあたっている。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>アセスメント・プランにおける評価項目の一つである「卒業生調査」「就職先調査」において、本プログラムに関する項目を設け、分析することで卒業生の状況や企業評価を把握する。</p>
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシウムからの情報を含め、高等教育業界の情報を積極的に収集し、本プログラムの改善に役立っている。また、教育関連企業とデータドリブン型教育改善に関する共同研究を行うことで、その成果を将来的に本プログラムの改善にフィードバックをする予定である。</p>
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	<p>本学が養成する学生像は、“本学におけるキャリア教育の理念”に「学ぶ喜び、知る楽しさ、実践する手応え、仲間と協働し、社会に貢献する充実感を糧に、人生に対する確かな展望を得て、生涯に亘り元氣よく生きていく専門的職業人」として描かれていることから、数理・データサイエンス・AI教育に留まらず、すべての教育について、学修者中心で実社会で役立つことを意識し実施している。</p> <p>数理・データサイエンス・AI教育に関する授業では、e-Stat(国勢調査、民間企業の退職金etc)などのweb上の統計データの利活用をはじめ、スマートウォッチ(心拍数、活動数、睡眠状態による健康管理)、自動運転、アバター、企業におけるデータの利活用(購買データ、アクセスログetc)など、できるだけ身近な具体例を用いて、数理・データサイエンス・AI教育に対して「学ぶ楽しさ」や「学ぶことの意義」を理解させる工夫を行っている。</p>
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	<p>授業中の提出課題や授業評価アンケートをもとにした教職員W.G.によるリフレクションを通して、より分かりやすい授業を目指して、教育内容や方法、評価法等の見直しを行っている。</p>

授業科目名 (コード番号)	授業形態	単位数	総時間数	学年	開講時期	卒業要件	資格取得要件	科目 責任者名
情報基礎 (F12000)	演習	1	30	1	前期	医療検査学科 必修 診療放射線学科 必修 口腔保健学科 必修 看護学科 選択必修 こども教育学科 選択	看護学科 養教免必修 こども教育学科 保育士選択必修 こども教育学科 幼教免必修 こども教育学科 小教免必修	中田康夫
科目担当者	中田康夫、大森雅人、佐野太亮、市川尚、室崎友輔、大城亜水、伴仲謙欣							

授業の概要	<p>昨今、Society5.0等の喫緊のデータ・デジタル化社会や持続可能社会（SDGs等）に向け、文系・理系を問わず、数理・データサイエンス・AIに関する知識及び技術について体系的な教育が必要となっています。</p> <p>そこで本演習は、数理・データサイエンス・AIに関する知識及び技術に関する基礎（入門）的な学修と、大学生活や就職活動において必要となるコンピューターやインターネットスキルの1つであるWindowsやMicrosoft Officeのアプリケーションの基本的な操作方法を学修します。</p>
アクティブ・ラーニングの要素	<p>(レ) ICT (manaba) 活用の双方向型授業</p> <p>() ディスカッション、ディベート</p> <p>() 実習、フィールドワーク</p> <p>(レ) 反転授業</p> <p>(レ) ICT (manaba) 活用の自主学習支援</p> <p>(レ) グループワーク (レ) プレゼンテーション</p> <p>() 課題解決型学習(外部協定 有・無)</p> <p>() その他 ()</p>
教員の実務経験	—

授業回	授業内容	授業時間外の学修
第1回	導入、学内でのICTの利活用①（ポータル、manaba、プリント等の使い方）	<p>【事前】シラバスに目を通し、授業の流れ、学修の到達目標等を把握（30分）</p> <p>【事後】本単元の学修内容の復習（30分）</p>
第2回	学内でのICTの利活用②（gmail、googledrive、onedrive、office365、googleアンケート、伝助etc）	<p>【事前】gmail、googledrive、onedrive、office365等について予習（30分）</p> <p>【事後】本単元の復習（30分）</p>
第3回	データ・AIを扱うときの留意事項	<p>【事前】メールの活用術（manabaの使い方、ビジネスメールの書き方・送り方）について予習（30分）</p> <p>【事後】本単元の復習と活用（30分）</p>
第4回	データ保護の留意事項	<p>【事前】デジタル社会におけるデータ保護に関して予習（30分）</p> <p>【事後】本単元の復習（30分）</p>
第5回	社会におけるデータ・AIの利活用①（事例紹介）	<p>【事前】社会におけるデータ・AIの利活用について予習（30分）</p> <p>【事後】本単元の復習（30分）</p>
第6回	文書作成ソフトの操作①（チラシの作成）	<p>【事前】キーボード入力への習熟（30分）</p> <p>【事後】授業内で出されたレポート課題に取り組む（30分）</p>
第7回	文書作成ソフトの操作②（ポスターの作成）	<p>【事前】前回課題の遂行とソフトへの習熟（30分）</p> <p>【事後】授業内で出されたレポート課題に取り組む（30分）</p>
第8回	プレゼンテーションソフトの操作	<p>【事前】プレゼンテーションソフトに関して予習（30分）</p> <p>【事後】授業内で出されたレポート課題に取り組む（30分）</p>
第9回	社会におけるデータ・AIの利活用②（データ・AI活用領域の広がりや、技術概要の解説概要の解説）	<p>【事前】データ・AI活用領域の広がりや技術概要について予習（30分）</p> <p>【事後】本単元の復習（30分）</p>

第 10 回	データドリブン（駆動）型社会について	【事前】 データドリブン（駆動）型社会に関する予習（30分） 【事後】 本単元の復習（30分）
第 11 回	データを読む	【事前】 「表計算ソフト」に関して予習（30分） 【事後】 授業内で出されたレポート課題に取り組む（30分）
第 12 回	データを扱う際の留意事項	【事前】 データを扱う際の留意事項に関する予習（30分） 【事後】 授業内で出されたレポート課題に取り組む（30分）
第 13 回	データを扱う	【事前】 データの取り扱いに関して予習（30分） 【事後】 授業内で出されたレポート課題に取り組む（30分）
第 14 回	データを説明する	【事前】 データの説明方法に関して予習（30分） 【事後】 授業内で出されたレポート課題に取り組む（30分）
第 15 回	まとめ・学修の到達目標の確認	【事前】 第 1 回～第 14 回までの学修内容のリフレクション（30分） 【事後】 今後の自己の課題の明確化（30分）

学修の到達目標	
到達目標 1	パソコン活用に関する基礎的なスキルを用いて、授業内で与えられた課題を達成することができる。
到達目標 2	データドリブン（駆動）型社会について基本事項を理解したうえで、データを収集・分析・説明するための基礎的な知識とスキルについて説明できる。

ルーブリック		
評価基準		
到達目標 1	秀	基礎的なスキルのみならず、能動的・主体的な学修によりスキルを向上させようとしている。
	優	基礎的なスキルを十分なレベルで修得している。
	良	基礎的なスキルを修得しているが、十分なレベルには達していない。
	可	必要最低限のスキルを修得している。
	不可	必要最低限のスキルを修得していない。
到達目標 2	秀	客観的な根拠に基づき十分論理的に説明することができ、なおかつ、根拠の限界も認識している。
	優	客観的な根拠に基づき十分論理的に説明することができる。
	良	客観的な根拠に基づき論理的に説明することができる。
	可	多少根拠は薄くてもある程度論理的に説明することができる。
	不可	根拠に基づき論理的に明することができない。

評価方法と評価項目の関係							
評価方法	定期試験	提出物	成果発表 (口頭・実技)	作品	ポートフォリオ	その他	合計
評価割合	70	0	0	30	0	0	100
到達目標 1	0	0	0	30	0	0	30
到達目標 2	70	0	0	0	0	0	70

※評価項目で示す評価割合は、授業運営上のおおよその目安を示したものです。

評価方法	評価の実施方法と注意点
定期試験	15回の学修を踏まえ、レポート課題の提出を課す。
作品	学修課題の達成状況で評価する。

履修に必要な知識・技能など
<p>USBメモリを必ず持参すること（演習内で作成したファイルを保管するため）。</p> <p>基本的なキーボード操作ができることを前提とする。本授業では、そうした操作スキルを活用しての応用的な内容で授業を行う。各授業は、相互に関連した内容で構成されているので、欠席や遅刻があると学習成果が著しく低下するので注意してほしい。</p>

教科書・ISBN
使用しません。

参考書
適宜紹介します。

※授業内容・評価方法・評価割合などについては、履修者人数や学修進度等の要因により変更することがあります。

授業科目名 (コード番号)	授業形態	単位数	総時間数	学年	開講時期	卒業要件	資格取得要件	科目 責任者名
情報メディア演習 (F12010)	演習	1	30	1	後期	医療検査学科 選択必修 診療放射線学科 必修 口腔保健学科 必修 看護学科 必修 こども教育学科 選択	看護学科 養教免必修 こども教育学科 保育士選択必修 こども教育学科 幼教免必修 こども教育学科 小教免必修	大森雅人
科目担当者	大森雅人、中田康夫、伊藤彰、室崎友輔、大城亜水、伴仲謙欣							

授業の概要	<p>昨今、Society5.0等の喫緊のデータ・デジタル化社会や持続可能社会（SDGs等）に向け、文系・理系を問わず、数理・データサイエンス・AIに関する知識及び技術について体系的な教育が必要となっています。</p> <p>そこで本演習は、数理・データサイエンス・AIに関する知識及び技術に関する応用的な学修と、大学生活や就職活動、社会人として必要となるプレゼンテーションに関する技法を学修します。</p>
アクティブ・ラーニングの要素	<p>(レ) ICT (manaba) 活用の双方向型授業 () ICT (manaba) 活用の自主学習支援</p> <p>() ディスカッション、ディベート (レ) グループワーク (レ) プレゼンテーション</p> <p>() 実習、フィールドワーク (レ) 課題解決型学習(外部協定 有・無)</p> <p>() 反転授業 () その他 ()</p>
教員の実務経験	—

授業回	授業内容	授業時間外の学修
第1回	導入、プレゼンのためハードに関するスキル・テクニック①(動画配信)	<p>【事前】プレゼンのためハードに関するスキル・テクニック(動画配信)に関して予習(30分)</p> <p>【事後】本単元の復習(30分)</p>
第2回	プレゼンのためハードに関するスキル・テクニック②(遠隔会議)	<p>【事前】プレゼンのためハードに関するスキル・テクニック(遠隔会議)に関して予習(30分)</p> <p>【事後】本単元の復習(30分)</p>
第3回	ICT・データサイエンスに役に立つソフトの活用	<p>【事前】ICT・データサイエンスに役に立つソフトの活用に関して予習(30分)</p> <p>【事後】本単元の復習(30分)</p>
第4回	デジタル社会で起きている変化	<p>【事前】デジタル社会で起きている変化に関して予習(30分)</p> <p>【事後】本単元の復習(30分)</p>
第5回	デジタル社会で活用されているデータ	<p>【事前】デジタル社会で活用されているデータに関して予習(30分)</p> <p>【事後】本単元の復習(30分)</p>
第6回	第1回プレゼンテーションに向けた準備①(グループワーク：企画・立案/スライド作成)	<p>【事前】「情報基礎」で学修したパワーポイントの操作方法の復習(30分)</p> <p>【事後】課題の遂行(30分)</p>
第7回	第1回プレゼンテーションに向けた準備②(グループワーク：スライド作成/予行演習)	<p>【事前】課題の遂行(30分)</p> <p>【事後】課題の遂行(30分)</p>
第8回	第1回プレゼンテーション本番	<p>【事前】課題の遂行(30分)</p> <p>【事後】自分たちの発表に対する個人のリフレクション(30分)</p>
第9回	データ・AI利活用のための技術	<p>【事前】データ・AI利活用のための技術に関して予習(30分)</p> <p>【事後】本単元の復習(30分)</p>
第10回	データ・AI利活用の現場	<p>【事前】データ・AI利活用の現場に関して予習(30分)</p> <p>【事後】本単元の復習(30分)</p>

第 11 回	データ・AI 利活用の最新動向	【事前】データ・AI 利活用の最新動向に関して予習 (30 分) 【事後】本単元の復習 (30 分)
第 12 回	データ・AI の活用領域 (さまざまな領域でデータ・AI が活用されていることを知る) 第 2 回プレゼンテーション準備① (グループワーク：企画・立案／スライド作成)	【事前】第 1 回プレゼンテーション後のリフレクション内容の確認 【事後】課題の遂行 (30 分)
第 13 回	第 2 回プレゼンテーションに向けた準備② (グループワーク：スライド作成／予行演習)	【事前】課題の遂行 (30 分) 【事後】課題の遂行 (30 分)
第 14 回	第 2 回プレゼンテーション本番	【事前】課題の遂行 (30 分) 【事後】自分たちの発表に対する個人のリフレクション (30 分)
第 15 回	まとめ・学修の到達目標の確認	【事前】第 1 回～第 14 回までの学修内容のリフレクション (30 分) 【事後】今後の自己の課題の明確化 (30 分)

学修の到達目標

到達目標 1	資料を分析・整理し、プレゼンテーションができる。
到達目標 2	データ・AI 利活用のために必要な知識や技術について説明できる。

ルーブリック

評価基準		
到達目標 1	秀	自発的に情報を収集・整理・分析・活用できる。その結果は実社会で通じるレベルである。
	優	自発的に情報を収集・整理・分析・活用でき、その結果は解の導きに有効である。
	良	ある程度自発的に情報を収集・整理・分析・活用できる。
	可	他者の助言があれば情報を収集・整理・分析できる。
	不可	情報を収集・整理・分析できない。
到達目標 2	秀	客観的な根拠に基づき十分論理的に説明することができ、なおかつ、根拠の限界も認識している。
	優	客観的な根拠に基づき十分論理的に説明することができる。
	良	客観的な根拠に基づき論理的に説明することができる。
	可	多少根拠は薄くてもある程度論理的に説明することができる。
	不可	根拠に基づき論理的に説明することができない。

評価方法と評価項目の関係

評価方法	定期試験	提出物	成果発表 (口頭・実技)	作品	ポートフォリオ	その他	合計
評価割合	40	20	40	0	0	0	100
到達目標 1	0	0	40	0	0	0	40
到達目標 2	40	20	0	0	0	0	60

※評価項目で示す評価割合は、授業運営上のおおよその目安を示したものです。

評価方法	評価の実施方法と注意点
定期試験	15 回の授業後に、レポート課題を課す。
提出物	学修内容ごとに提出物を課す。学修内容に則した具体的な記述が必要となる。
成果発表 (口頭・実技)	PowerPoint を活用して発表する機会を 2 回設ける。その際には、効果的な発表になるように、必ず何らかの役割を果たすようにすること。

履修に必要な知識・技能など

PC 操作に関するスキルを、すでに修得していることを前提とする。本授業では、そうした操作スキルを活用しての応用的な内容で授業を行う。各授業は、相互に関連した内容で構成されているので、欠席や遅刻があると学習成果が著しく低下するので注意してほしい。

教科書・ISBN

使用しません。

参考書

適宜紹介します。

※授業内容・評価方法・評価割合などについては、履修者人数や学修進度等の要因により変更することがあります。

授業科目名 (コード番号)	授業形態	単位数	総時間数	学年	開講時期	卒業要件	資格取得要件	科目 責任者名
基礎統計学 (F12170)	講義	1	15	1	前期	医療検査学科 必修 診療放射線学科 必修 口腔保健学科 必修 看護学科 選択必修 こども教育学科 選択必修	—	中田康夫
科目担当者	中田康夫、高松邦彦							

授業の概要	近代統計学は、ライフサイエンス分野をはじめ、経済分野など様々な数理・データサイエンスで利用されている。最近の、エビデンスベースの研究においては、得られた実験データを、適切な方法で統計処理しなければならない。そのために、高校までに習得した確率・統計をもとに、数理・データサイエンスにおける基本的な部分である統計学の基本的な概念を理解する。							
アクティブ・ラーニングの要素	(レ) ICT (manaba) 活用の双方向型授業		(レ) ICT (manaba) 活用の自主学習支援		(レ) ディスカッション、ディベート		(レ) グループワーク (レ) プレゼンテーション	
教員の実務経験	(レ) 実習、フィールドワーク		() 課題解決型学習(外部協定 有・無)		(レ) 反転授業		() その他()	
	—							

授業回	授業内容	授業時間外の学修
第 1 回	導入 (担当者：中田、高松)	【事前】教科書の P.10～P.30 を読み理解する (120分) 【事後】授業中に説明した P.10～P.30 について、一枚まとめを行う (120分)
第 2 回	Σ を使った表現方 (担当者：中田、高松)	【事前】教科書 P.31～P.60 を読み理解する (120分) 【事後】授業中に説明した P.31～P.60 について、一枚まとめを行う (120分)
第 3 回	度数分布とヒストグラム (担当者：中田、高松)	【事前】教科書 P.61～P.90 を読み理解する (120分) 【事後】授業中に説明した P.61～P.90 について、一枚まとめを行う (120分)
第 4 回	様々な統計量 その 1 (平均・分散・標準偏差) (担当者：中田、高松)	【事前】教科書の P.91～P.120 を読み理解する (120分) 【事後】授業中に説明した P.91～P.120 について、一枚まとめをおこなう (120分)
第 5 回	様々な統計量その 2 (CV・相関係数) (担当者：中田、高松)	【事前】教科書 P.121～P.150 を読み理解する (120分) 【事後】授業中に説明した P.121～P.150 について、一枚まとめをおこなう (120分)
第 6 回	離散的と連続的の違いとは (担当者：中田、高松)	【事前】教科書 P.151～180 を読み理解する (120分) 【事後】授業中に説明した P.151～P.180 について、一枚まとめを行う (120分)
第 7 回	確率と確率密度関数 (担当者：中田、高松)	【事前】教科書 P.181～210 を読み理解する (120分) 【事後】授業中に説明した P.181～210 について、一枚まとめを行う (120分)
第 8 回	まとめ (担当者：中田、高松)	【事前】これまでのまとめを読み理解する (120分) 【事後】授業中に説明したすべての内容のまとめを行う (120分)

学修の到達目標	
到達目標 1	統計量とは何かを理解し、いくつかの統計量について求めることができる。
到達目標 2	離散的な統計と、連続量の統計の違いを理解する。
到達目標 3	数理・データサイエンスの基礎としての統計学を理解すること。

ルーブリック		
評価基準		
到達目標 1	秀	統計量について理解できているのみならず、授業で習う統計量を自分で求めることができ、他者へ説明することができ、さらに他者が理解する手助けをすることができ、他者から評価されている。
	優	統計量について理解できているのみならず、授業で習う統計量を自分で求めることができ、かつ、他者へ説明することができ、さらに他者が理解する手助けをすることができる。
	良	統計量について理解できているのみならず、授業で習う統計量を求められ、他者へ説明することができる。
	可	統計量を理解できる。
	不可	統計量を理解できない。
到達目標 2	秀	離散的と連続的な統計の違いについて理解でき、他者へ説明でき、さらに他者が理解する手助けをすることができる、加えて他者から評価されている。
	優	離散的と連続的な統計の違いについて理解でき、他者へ説明でき、さらに他者が理解する手助けをすることができる。
	良	離散的と連続的な統計の違いについて理解でき、他者へ説明することができる。
	可	離散的と連続的な統計の違いについて理解できる。
	不可	離散的と連続的な統計の違いについて理解できない。
到達目標 3	秀	数理・データサイエンスの基礎としての統計学を理解でき、他者へ説明でき、さらに他者が理解する手助けをすることができる、加えて他者から評価されている。
	優	数理・データサイエンスの基礎としての統計学を理解でき、他者へ説明でき、さらに他者が理解する手助けをすることができる。
	良	数理・データサイエンスの基礎としての統計学を理解でき、他者へ説明することができる。
	可	数理・データサイエンスの基礎としての統計学を理解できる。
	不可	数理・データサイエンスの基礎としての統計学を理解できない。

評価方法と評価項目の関係							
評価方法	定期試験	提出物	成果発表 (口頭・実技)	作品	ポートフォリオ	その他	合計
評価割合	40	60	0	0	0	0	100
到達目標 1	20	30	0	0	0	0	50
到達目標 2	10	15	0	0	0	0	25
到達目標 3	10	15	0	0	0	0	25

※評価項目で示す評価割合は、授業運営上のおおよその目安を示したものです。

評価方法	評価の実施方法と注意点
定期試験	レポート試験を、最終に行う。
提出物	授業毎に、A4 用紙 1 枚に授業のまとめを提出してもらい、理解しているかどうかを評価する。授業の最後に、8 回分のまとめを提出してもらい、理解しているかどうかを評価する。

履修に必要な知識・技能など
統計量とは何かを理解し、平均や標準偏差など授業で習った統計量を算出できるようになること。離散的な統計と、連続量の統計の違いを理解すること。確率の定義及び、確率密度関数がどのようなものかを理解すること。予習と復習を欠かさないこと。

教科書・ISBN

統計学 ～記述統計学篇～ 川純一監修 神戸常盤大学数理データサイエンス教育研究会編

参考書

適時お示しします

※授業内容・評価方法・評価割合などについては、履修者人数や学修進度等の要因により変更することがあります。

授業科目名 (コード番号)	授業形態	単位数	総時間数	学年	開講時期	卒業要件	資格取得要件	科目 責任者名
プログラミング入門 (F12240)	演習	1	15	1	後期	医療検査学科 選択必修 診療放射線学科 選択 口腔保健学科 選択 看護学科 選択必修 こども教育学科 選択必修	—	関雅幸
科目担当者	関雅幸							

授業の概要	<p>「プログラミング」技術の基礎を習得する。</p> <p>プログラミングとはプログラミング言語を使って、コンピュータに行わせたい仕事の手順を記述することである。今後、人工知能が著しく進化して、仕事のやり方が変わることが予測される社会において、コンピュータに何をやらせるかを考えることができる思考を持つことが重要となる。この授業では、Scratch というプログラミングツールを用いてプログラムを作成してもらう。前半は基本的な事柄の説明を聞き、演習を行ってもらう。後半はグループに分かれてオリジナルプログラムを作成してもらう。</p>							
アクティブ・ラーニングの要素	<input type="checkbox"/> ICT (manaba) 活用の双方向型授業 <input type="checkbox"/> ICT (manaba) 活用の自主学習支援 <input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート <input type="checkbox"/> グループワーク <input type="checkbox"/> プレゼンテーション <input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク <input type="checkbox"/> 課題解決型学習(外部協定 有・無) <input type="checkbox"/> 反転授業 <input type="checkbox"/> その他()							
教員の実務経験	—							

授業回	授業内容	授業時間外の学修
第 1 回	Scratch を使う準備、Scratch の基本	【事前】シラバスの内容の熟読 (20 分) 【事後】疑問点を確認し、再考する (150 分)
第 2 回	プログラムの流れを知る	【事前】メッセージの送受信の方法等を教科書で確認する (60 分) 【事後】第 2 回の中でうまくできないところを再考する (140 分)
第 3 回	変数・配列について	【事前】変数や配列の使い方を教科書で確認する (60 分) 【事後】第 3 回の中でうまくできないところを再考する (140 分)
第 4 回	構造化プログラミングについて	【事前】処理の構造等を教科書で確認する (60 分) 【事後】第 4 回の中でうまくできないところを再考する (140 分)
第 5 回	オリジナルプログラムに挑戦Ⅰ：概要を決め、コードを書く	【事前】どんなものを作るか考える (150 分) 【事後】終わらない部分を作る (140 分)
第 6 回	オリジナルプログラムに挑戦Ⅱ：問題点の抽出、改善	【事前】問題点を考える (110 分) 【事後】不十分な点がないか考える、終わらない部分を作る (140 分)
第 7 回	オリジナルプログラムに挑戦Ⅲ：テストそして改善	【事前】テストする項目を考える (110 分) 【事後】さらなる工夫ができないか考える (140 分)
第 8 回	プログラムのチェック・まとめ	【事前】確認すべき事柄を考える (110 分) 【事後】プログラムの説明・使い方の文章を考える (140 分)

学修の到達目標	
到達目標 1	コンピュータに行わせたいことを論理的に考えることができるようになる。
到達目標 2	様々な考えや知識を総合して課題の解決策をデザインすることができるようになる。
到達目標 3	誰かの役に立つことに喜びを感じ、具体的に行動することができるようになる。
到達目標 4	授業で学び、感じたことをまとめることができるようになる。

ルーブリック		
評価基準		
到達目標 1	秀	コンピュータに行わせたいことをコンピュータが実行できる手順に置き換えることができ、満足できる水準を超えている。
	優	コンピュータに行わせたいことをコンピュータが実行できる手順に置き換えることができ、満足できる水準に達している。
	良	コンピュータに行わせたいことをコンピュータが実行できる手順に置き換えることができる。
	可	コンピュータに行わせたいことをコンピュータが実行できる手順に置き換えようとする努力が認められる。
	不可	コンピュータに行わせたいことをコンピュータが実行できる手順に置き換えることができない。
到達目標 2	秀	様々な知識や考えを統合して課題解決策をデザインすることができ、満足できるレベルを超えている。
	優	様々な知識や考えを統合して課題解決策をデザインすることができ、十分満足できるレベルである。
	良	ある程度様々な知識や考えを統合して課題解決策をデザインすることができる。
	可	様々な知識や考えを統合して課題解決策をデザインしようとする努力が認められる。
	不可	課題解決策をデザインすることができない。
到達目標 3	秀	かなり自発的に周囲に貢献できる。
	優	十分に自発的に周囲に貢献できる。
	良	ある程度自発的に周囲に貢献できる。
	可	周囲に何らかの貢献をしようとする努力が認められる。
	不可	貢献への積極性がない。
到達目標 4	秀	学んだこと・感じたことを十分にまとめることができ、他者が参考にできるレベルにある。
	優	学んだこと・感じたことを十分にまとめることができる。
	良	学んだこと・感じたことをまとめることができる。
	可	学んだこと・感じたことを不十分ではあるが、まとめることができる。
	不可	学んだこと・感じたことをまとめることができない。

評価方法と評価項目の関係							
評価方法	定期試験	提出物	成果発表 (口頭・実技)	作品	ポートフォリオ	その他	合計
評価割合	30	30	0	40	0	0	100
到達目標 1	0	0	0	40	0	0	40
到達目標 2	15	0	0	0	0	0	15
到達目標 3	15	0	0	0	0	0	15
到達目標 4	0	30	0	0	0	0	30

※評価項目で示す評価割合は、授業運営上のおおよその目安を示したものです。

評価方法	評価の実施方法と注意点
定期試験	レポート試験
提出物	1枚まとめ
作品	プログラム

履修に必要な知識・技能など

コンピュータに関する基本的な知識があり、コンピュータに行わせたい課題に対して興味・関心がある。

教科書・ISBN

9784822286170 『Scratch で学ぶ プログラミングとアルゴリズムの基本 改訂第2版』 中植正剛他 著 日経BP社

参考書

『楽しく学ぶ アルゴリズムとプログラミングの図鑑』 森巧尚、まつむらまきお（イラスト）著 マイナビ出版

※授業内容・評価方法・評価割合などについては、履修者人数や学修進度等の要因により変更することがあります。

全学共通カリキュラムツリー

全学DP
学位授与の方針

ときわコンピテンシー

知性

感性

専門性

市民性

←主体的に修得しようとする態度を形成

専門教育分野

医療検査学科 診療放射線学科 看護学科 口腔保健学科 こども教育学科

基盤教育分野



必修科目



選択科目 ※学科により異なる

全学CP
教育課程の方針

人間探究
科目群

創造実践
科目群

超ときわびと

プロジェクトデザイン

地域との協働 B

コミュニティデザイン

地域との協働 A

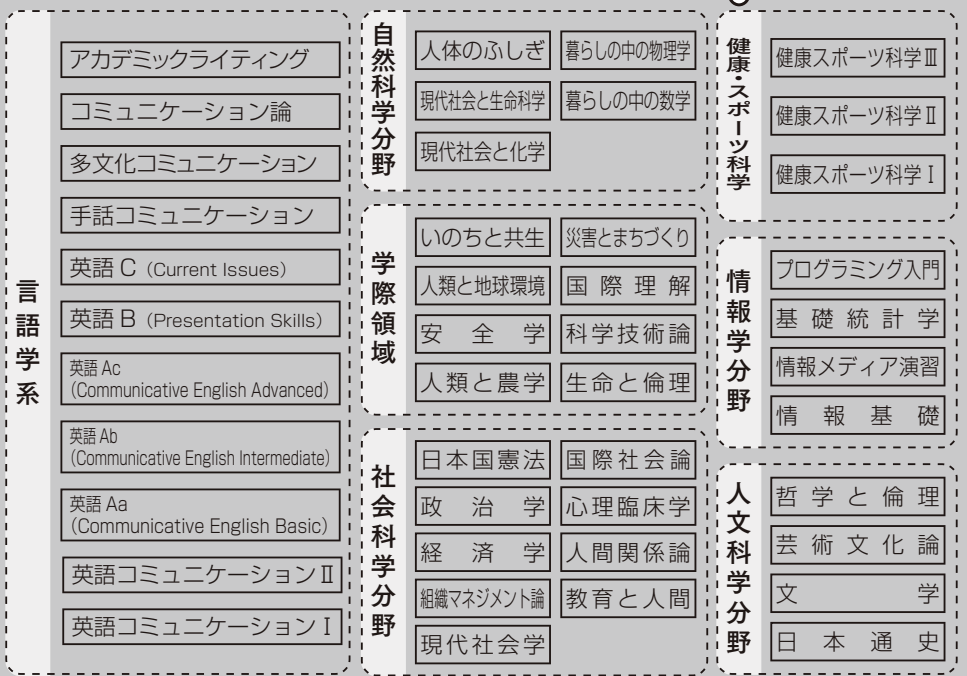
学びの始め
科目群

まなぶる▶ときわびとⅡ

大学道場
miniゼミ B

まなぶる▶ときわびとⅠ

大学道場
miniゼミ A



全学 AP 入学者受入の方針

神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部

ときわ教育推進機構規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、学校法人玉田学園神戸常盤大学学則第4条2項、神戸常盤大学短期大学部学則第3条2項の規定に基づき、ときわ教育推進機構（以下「機構」という。）に関し必要な事項を定める。

(目 的)

第2条 機構は、神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部（以下「本学」という。）の「建学の精神」および「ときわ教育目標」に則り、全学的な「教育の質保証」システムを構築するために、学内各組織との連携を深め、教育改革を主導的に設計・推進し、ティーメイト教育の実践を支援することを目的とする。

(業 務)

第3条 機構は、前条の目的を達成するため、全学5ポリシーの趣旨に基づき、次の各号に掲げる業務を迅速かつ効率的に行う。

- (1) 全学的な教育の中長期目標及び計画の策定
- (2) 全学的な教育方針と学部及び学科教育との整合性の確保
- (3) 「教育の質保証」に係る基本方針及び基本計画の企画立案
- (4) 各学部・学科の課題を相互に関連付けし、教育改革等に関する基本方針及び基本計画の企画立案
- (5) 「基盤教育」と「専門教育」を有機的に結びつける教育課程編成の推進
- (6) 基盤教育の運営と推進
- (7) 正課教育、準正課教育、正課外教育、あらゆる教育活動の充実と相関の検証
- (8) その他前条の目的を達成するために必要なこと

(機構長)

第4条 機構に機構長を置き、学長が指名する。

(副機構長)

第5条 機構に、副機構長を置くことができる。

- 2 副機構長は、機構長が推薦し学長が承認する。
- 3 副機構長は、機構長の職務を補佐し、機構長が指示する機構の重要な業務を処理する。

(機構員)

第6条 機構員は、本学の専任教員のうちから、学長が指名する者をもって充てる。

- 2 学長は、指名を行うときは、事前に当該教員の所属長の承諾を得るものとする。

3 機構員は、機構長が指示する機構の業務を処理する。

(任期)

第7条 機構長、副機構長、機構員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

(機構会議)

第8条 機構に、第3条に掲げる業務に関する事項を協議するため、ときわ教育推進機構会議を置く。

2 ときわ教育推進機構会議に議長を置き、機構長をもって充てる。

3 議長は、ときわ教育推進機構会議を主宰する。

4 議長に事故のあるときは、副機構長が、その職務を代行する。

5 議長は、必要に応じ機構員以外にも会議への召集と業務支援を命ずることが出来る。

(所管部署)

第9条 機構に関する事務は、学術推進課と教務課が行う。

(規程の改廃)

第10条 この規程は、運営委員会の承認を得るものとする。但し、学長が必要と判断する場合、教授会の議を経るものとする。

(附 則)

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

この規程は、令和3年4月1日から施行する。

神戸常盤大学 アセスメント・プラン(実施方針)

神戸常盤大学では、知性と感性を備えた優れた専門職業人の育成を目的として、ディプロマ・ポリシー(DP)、カリキュラム・ポリシー(CP)、アドミッション・ポリシー(AP)及びスチューデントサポート・ポリシー(SSP)を定め、更に、正課、準正課、正課外に亘る教育の成果を点検・評価するためのアセスメント・ポリシー(ASP)を定めている。

このアセスメント・ポリシーを実質的に機能させるために、アセスメント・プランを策定し、目的、実施方法、実施計画、及び活用に関する実施方針を定める。

【全学アセスメント・ポリシー】

本学は、ときわ教育目標を達成するため、入学、教学、卒業(学位)、支援その他の事項に関して、次に掲げる評価を毎年度定期的に行う。

- ①大学を対象とする評価
- ②学部・学科を対象とする評価
- ③授業科目を対象とする評価
- ④学生個人を対象とする評価

被評価者は評価の結果を受けて、必要と認められる事項に関して、適切な改善を行う

アセスメントの目的

本学が定める各ポリシーが適切であるかどうか、また本学の諸活動がポリシーに基づき適切に機能しているかを多面的・総合的に点検・評価し改善に繋げることで、ときわ教育の質を保証し、維持・向上させることを目的とする。

アセスメントの実施方法

☆評価対象は、①大学 ②学部・学科 ③授業科目 ④学生 とする。

☆各評価対象は、アセスメント実施計画表に示す点検・評価項目に基づき、各ポリシーや諸活動の適切性に加え、入学時(AP)、在学中(CP,SSP)、卒業前/卒業後(DP)の学修成果や満足度等の点検を実施する。

☆評価対象①～③は、ポリシーごとの点検結果を俯瞰的に捉え、ポイント A・B を念頭に自己評価する。

☆評価対象④は、自己の活動記録や学修成果を俯瞰的に捉え、自己評価を行い未来への目標を設定する。

アセスメント実施計画表

ポリシー		入学(AP)	教学(CP)・支援(SSP)	卒業(学位)(DP)・
ポイント A ※ポリシーや諸活動の 適切性		AP と選抜活動の 適切性	CP・SSP と教学・支援活動の 適切性	DP と学位授与活動の適切性、 社会からの評価
【本学が社会から選ばれ続ける大学】であることを目指し				
ポイント B ※「評価」と「改善」の 目指すべき方向		本学が 受験生から選ばれたか 入学者から入学満足度が 得られたか	在学生が 満足感を得られたか 成長を実感できたか テラーメイド教育を実感できたか	卒業生が 満足感と成長実感を得て卒業できたか 社会から受け入れられたか
点検・評価項目	①大学対象	☆②の点検・評価結果 ☆新入生調査	☆②～④の点検・評価結果 ☆在学生調査(全学年)	☆②④の点検・評価結果 ☆卒業前調査 ☆卒業生調査 ☆就職先調査
	②学部・学科 対象	☆入学試験情報 ☆基礎テスト ☆新入生調査	☆取得単位数、GPA 値、出席状況 ☆学籍情報 ☆在学生調査(全学年) ☆学生活動の記録・ときわコンピテン シーの自己評価	☆卒業前調査 ☆学籍情報 ☆国家試験・免許・資格情報 ☆教員採用試験情報 ☆就職・進学情報 ☆卒業生調査 ☆就職先調査
	③授業科目 対象	—	☆授業評価アンケート ☆単位取得率、成績分布、出席状況	—
	④学生個人 対象	—	☆取得単位数、GPA 値、出席状況 ☆学生活動の記録・ときわコンピテン シーの自己評価	☆取得単位数、GPA 値、出席状況 ☆卒業前調査 ☆卒業生調査

※学部・学科、授業科目及び学生個人レベルでは、学科等が独自の項目を追加する場合がある。

※評価項目については、定期的に全学的な見直しを実施する。

アセスメントの活用

☆各評価対象は、点検・評価結果から課題を抽出し、改善に取り組む。

☆各評価対象の点検・評価から抽出された課題や改善計画等は、学長会議・運営委員会で全学的に共有・審議し、理事会に報告する。

☆IR 室は、集計結果を各評価対象に提供し、学長会議等への報告情報を集約・作成する。

☆アセスメントに関する情報は IR 室が取り纏め、学内外への公表を積極的に行う。

以上



神戸常盤大学における数理・AI・データサイエンス教育プログラム取組概要

本教育プログラムを通じて修得することができる能力

- データの活用時の倫理・法律・社会的な留意事項や情報セキュリティなどの素養
- データ駆動型アプローチに関する素養ならびにAIを利活用するための素養
- 文書作成ソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトに関するスキル
- 記述統計学に基づくデータの分析（基本統計量、統計図表、回帰や相関関係）などのデータリテラシー

実施体制

委員会等	役割
ときわ教育推進機構長	大森雅人
ときわ教育推進機構・情報系/統計系科目責任者	中田康夫

開設される授業科目

学部	学科	情報系科目			統計系科目
		情報基礎 (1単位)	情報メディア 演習 (1単位)	プログラミング 入門 (1単位)	基礎統計学 (1単位)
保健科学部	医療検査学科	必修	選択必修	選択必修	必修
	診療放射線学科	必修	必修	選択	必修
	口腔保健学科	必修	必修	選択	必修
	看護学科	選択必修	必修	選択必修	選択必修
教育学部	こども教育学科	選択 (免許資格必修)	選択 (免許資格必修)	選択必修	選択必修

神戸常盤大学における数理・AI・データサイエンス教育プログラム補足資料



「AIデータサイエンス入門」必修化に向けた取組

神戸常盤大学では、令和8年度を目処に本プログラムを構成する科目「情報基礎」「情報メディア演習」「基礎統計学」を必修化することにより、本プログラをすべての学生が受講する体制を整える計画である。計画概要を下図に示す。

